

特集にあたって

東邦大学医療センター大森病院放射線科 堀 正明

今回、「MRI 撮像の工夫と解釈—わかりにくい病変と解剖」という特集を企画いたしました。本特集では、脊椎脊髄領域における解剖学的複雑さや診断の難しさに焦点を当てています。これらの病変は、画像診断における工夫や技術の進歩が特に求められる分野であり、診断精度を高めるための大前提として、そもそも病態や「画像で何を見たいのか」という点での深い知識が不可欠です。

今回の特集で取り上げた脊椎脊髄疾患には、腰椎分離症や椎間板ヘルニア、tethered cord syndrome、duropathies、頸椎症性神経根症、神経根病変など、多岐にわたる病態が含まれます。共通しているのは、漫然とルーチンの MRI を撮像、あるいは画像を観察しているだけでは、正確な評価が困難であると思われる疾患であることです。これらの疾患の背景には、解剖学的構造の複雑さがあったり、病態が画像上に微妙な形で反映されることが多かったりするため、詳細な知識と的確な画像解釈が求められます。

今回の特集では、これらのテーマに関して各分野のエキスパートである先生方に執筆をお願いし、MRI 撮像技術の工夫や解釈に関する具体的な知見を提供していただきました。たとえば、腰椎分離症では CT-like image を用いた評価法が、外側型椎間板ヘルニアでは部位特有の撮像条件の工夫が解説されています。また、occult tethered cord syndrome における腹臥位 MRI や、硬膜の欠損による脳脊髄液漏出症の診断における FIESTA 法の活用法、さらには頸椎症性神経根症における機能画像の応用など、診断精度を向上させる撮像方法やそのために必要な考え方が紹介されています。さらに、末梢神経疾患の評価においては、神経根や神経叢の解剖学的特徴を踏まえた撮像プロトコルや、新しい撮像技術の導入が議論されています。これらの知見は、診療に直結するだけでなく、MRI 撮像の新たな可能性を探る一助となることでしょう。

本特集を通じて、場合によっては普段の診療において遭遇する機会が少ない、あるいは診断に苦慮するような病態についての画像に関する理解が深まることを期待しております。また本特集が、わかりにくい病変の画像診断において実践的な知識を提供し、さらなる診断の質向上に寄与することを願っています。

最後になりましたが、ご多忙の中ご執筆いただきました先生方と編集委員の皆様様に心より感謝申し上げます。